

更級日記『源氏の五十余巻』確認テスト 解答・解説

■ 解答・解説

問1 願望（～たい）。

※「まほし」は希望・願望を表す助動詞。「見まほし」＝見たい。

問2（家族の）誰もがまだ都の暮らしに慣れていない時期で、（物語を持っている人に）話を持ちかけて借りるようなこともできなかった、という状態。

※上総から都に上って間もない一家の事情を押さえる。

問3 じれったい・待ち遠しい・気がかりだ。

問4 (ア) 「ゆかし」＝心がひかれて見たい・知りたい・聞きたい、の意。ここでは続きを「見たくてたまらない」気持ち。

問5 作者が（太秦に参籠して源氏物語を最後まで読み通したいと祈ったが）、物語を見つけ出して読むことができなかった、ということ。

問6 断定の助動詞「なり」の連体形。

※「をば（叔母）である人」の意で、体言「人」に連なるため連体形。存在・伝聞推定の「なり」ではない点に注意。

問7（久しぶりに会った姪である作者が）たいそうかわいらしく成長したことを、いとしく思い、めったにないこととして喜ぶ気持ち。

問8 (1) 叔母から作者（私）への敬意を表す謙譲語。「奉る」は「与ふ・贈る」の謙譲語で、物を差し上げる相手（作者）を敬う。(2) 意志（～よう／～つもりだ）。

問9 実用的な品物は、（贈り物としては）よくないでしょう。

※「まめまめし」＝実用的だ。「まさなし」＝よくない・不都合だ。「なむ」は強意＋推量。

問10 ①人も交じらず（誰もいない所で）一人で読んだ。②几帳の内にうち伏して、巻を引き出しては読んだ（昼も夜も灯をともして読みふけた）。

※本文「人も交じらず」「几帳の内にうち伏して、引き出でつつ見る」などから。

問11（その物語を）手に入れて帰る時の気持ちのうれしさといったら、たいへんなものであったよ。

※「ぞ～や」で詠嘆を強める。「いみじ」＝はなはだしい・たいへんだ。

問12（早く続きが読みたくて）心がはやり、気もそぞろになって（夢中で）読むさま。

問13 他人を交えず、几帳の内に身を伏せて一人きりになり、人目を避けて物語の世界に没頭する、強い独占欲と熱中ぶり。

問14 (1) 后（皇后）の位も何になろうか、いや何にもならない（物語を読むこの喜びにはとうてい及ばない）。(2) 反語。(3) 結びの語…「せ（む）」＝「せむ」。活用形…連体形。

※係助詞「か」の結びで文末が連体形「む（→せむ）」となる、係り結びの法則。

問15 昼は一日中、夜は目が覚めている間中（ずっと）。

※「日暮らし」＝一日中。「限り」＝～の間ずっと。

問16 （繰り返し読むうちに）源氏物語の文章が、自然とそらで（暗記して）思い浮かんでくるほどになっている状態。

問17 (ア) 「まさなし」＝よくない・不都合だ。ここは「(贈り物として) よくないだろう」の意。

問18 僧は「法華経五の巻を早く習え」と勧めたが、作者は誰にも話さず、習おうとも思わずに（物語に夢中で）受け流した。

問19 例：物語にあこがれ、源氏物語を手に入れて寝食を忘れ夢中で読みふける、空想好きで一途な少女。
(約40字)

問20 作者…菅原孝標女。 作品名…『蜻蛉日記』（作者の伯母にあたる藤原道綱母の作）。
